

## 市民公開シンポジウム

### 「歴史から学ぶ感染症への視点」-1

# 感染症の歴史からの学びに、更に加える視点

加藤 茂孝

保健科学研究所

#### 1. 歴史からの学びの意味

ポール・ゴーギャンの問いかける「我々はどこから来て、何者で、どこへ行くのか？」の答えを知りたい。また、ポール・ヴァレリーの言うように「人は後ろ向きに未来へ入って行く」ので、過去から学ぶ以外にない。

#### 2. 歴史を動かした感染症

歴史記録でわかるのは、感染症は人の移動によって広がる事である。人類は19世紀後半以降、病原体を発見し、ワクチンで予防し、細菌感染症は抗生剤で治癒出来るようになった。そのおかげで、20世紀後半までには感染症制圧は、一見成功しつつあった。最大の災禍であった14世紀のペスト(黒死病、7500万人死亡と推定)で社会が変わった(暗黒の中世⇒近世をもたらした)。COVID-19でもペストに比べればはるかに死者は少ないが社会の状況が世界的に変わった。

先進国の死因は1950年を境に劇的に変化し、感染症⇒生活習慣病への交代が起きた。しかし、新興感染症は今後も絶えないで人類と共にある。絶えない理由は、①人の感染症は動物から入る事、②人の大量迅速移動で感染が拡大する事による。21世紀になって4回の新興感染症のパンデミックが起こったが、それらはSARS、新型インフルエンザ、MERS、COVID-19の4疾患であり、平均すれば5年に1度、またそれが日本にも入ったのは2回で、平均すれば10年に1度である。従って常に備えが必要になる。備えとしては、法律、医療制度、研究、創薬、情報伝達システムなどである。

#### 3. 新しい視点①：ウイルスの見方が大きく変化

ウイルスは19世紀末に植物や動物・人の病気から発見された。それらは、当然全て病原体だったので、長くウイルスは悪者扱いされていた。しかし、21世紀の研究の進歩によって次第に、ウイルスは人類の進化にも大きな貢献をしている事が分かり自然界において人類の仲間であると認められるようになって来た。これからはこの新しい視点が感染症を考える時に必要である。

#### 4. 不安を減らす情報発信

見えない物は怖い。それを科学が見えるようにしてきたが、それでも不安はゼロにはできない。不安を減らすために正しい情報発信が必要である。

やっとCOVID-19の出口が見えてきたが、まだ出口までの距離が不明である。今後のシナリオとしては、いつか風邪コロナウイルスになると予想されている。COVID-19の影響を分析すると①生物学的、②心理学的、③社会的という性格の異なる3つの感染症があり、それぞれに上手く対応しなくてはならない。正しい情報発信の内容としては、①リスク・マネジメント、②明確な方針の提示、③政治が科学的基礎を持つ事である。

## 5. 新しい視点②：COVID-19で隠れていたもの

(1) 幸せな人生とは何か？ (2) 人口問題こそ現在の日本の根本の課題である。急激な人口減少により危機的状況にある。それを解決するためには、弱者に優しい政治こそが必要である。EHカーのいう「歴史とは、現在と過去との間の不断の対話」こそ、絶やしてはならない。